

脅迫、いやがらせに屈せず書く それは作家の意地



ときめきインタビュー 作家・森村誠一氏に聞く

’90日本のうたごえ神戸祭典(11月23、25日)、メイン企画のひとつ、非核神戸の港からうたごえナイスクルージング「サンシャインふじ」船上フェスティバル。森村誠一氏と寿岳章子さんのビッグ対談(司会：下里正樹氏)。森村氏は神戸市役所センター合唱団での講演と音楽の夕べ、合唱組曲「悪魔の飽食」以来のおつきあい。船上フェスを前に森村氏にインタビュー。インタビュは同団团长、田中嘉治今祭典企画委員長。

田中 日中友好協会の40周年記念で合唱組曲「悪魔の飽食」が演奏されました。この演奏に先立つ「日中友好新聞」での森村先生と作曲者池辺晋一郎先生の対談も興味深く読ませていただきました。今日は四十年近い日本のうたごえ祭典の歴史の中でも初めて、出演いただく先生に、その対談でも話されています。た「うたごえ合唱団」を代表いたします(笑)。いろいろお聞きしたいと思います。

森村 (笑) 田中さんの熱意と強引さと執拗さ。これはもう、ひき受けないと申しわけないと気になります。



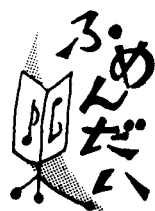
▲9月29日、日中友好協会40周年記念コンサート「友よ、白い花を」での森村氏(左)と池辺氏(右)。写真提供=日中友好協会

田中 「人間の証明」などは映画にもなりましたが、先生はよく言われていますね。作品が完成した段階で作者というのは作品と決別をしなければいけない、と。その中でこの「悪魔の飽食」は本人が決別したくても別れられないという状況にあるわけですが…。

森村 自由はあるか。日本に表現の自由はあるか。森村 まあ、「悪魔の飽食」は私にとっては重苦しい作品です。あれは日本軍の戦争悪事をくり出したものだから。日本の戦争悪というものは永久に消えるものではない。日本がそれ

に対して、表面的にはなく、本当の意味で日中不戦、平和、ノーモア・ウォーという意識に立たない限り、戦争犯罪を告発した作品は忘れるべきじゃないですね。田中 合唱組曲「悪魔の飽食」ができる前にすでに、あの本は三百万部のベストセラー、日本人の四十人に一人があの本を読んでいるという状況になり、それが右筋からの攻め口にとって代わられたという体験を先生はされました。日本に表現の自由がない、ということを感じるんなら、会におっしゃっていただけますか。

森村 結局、日本の言論・表現の自由というのは表面的には保障されていますね。だから、我々が何を言っても政府を批判しよう、国家がそれに対して弾圧する、ということはないですよ。だから、国家と国民の関係は一応、保障されているんだけど、しかし、現実には暴力団が脅迫した場合は、表現する人間が武装して対抗できない、という事情があります。そうすると、恐いから黙る、ということがある。現に、朝日新聞の記者襲撃事件、フェリス女学院の学長、長崎の本島市長などの事件が起こっている。そういう状況はやはり恐いですよ。それ、そういうものは絶対に許せません、と発言しようとしても、出版社がおどろ腰になりますよ。



「最近の紙面はよくなってきた」という声を、ときおり聞くようになってきた。仮にお世辞だとしても嬉しいものだ。

現在、編集部は五名いるが、みんな一人ひとり大変個性的である。

それゆえにギクシャクすることもありますが、全体としては個性を持ち味がいい意味で発揮されつつあるようにも思う。

紙面が良くなっていることは、ナアナアでもバラバラでもないこの微妙な緊張関係が、ある意味で、紙面に魅力を与えているのだらう。

月一回編集委員会が確立されているのも大きい。編集部外の風が流れてくることも、マンネリや一人よがりの紙面をふせいでくれている。

編集部もできる限り「外」への接点をもつように努力している。その都度、本紙のプラスもマイナスも教えられる。

池辺晋一郎氏が「もっと他流試合を」と話されたのは目録会でのこと。読者が広がれば広がるほど、様々な声が紙面を豊かにしてくれる。

今号の嶋田氏の言葉ではないが、与えられるだけでなく創る文化を。せひ多くの方に本紙を広げてほしいと願う。(F)